イスラエル アンベールド Vol.1 「ガリラヤ湖」

英語版オリジナル 2017年2月10日公開：
Israel Unveiled Vol. 1: The Sea of Galilee
https://youtu.be/GvUlaWcwa4o
メッセージ by アミール・ツァルファティ
Behold Israel：http://beholdisrael.org

私のすぐ後ろにあるガリラヤ湖は、恐らく、世界で最も有名な海または湖でしょう。福音書に書かれている出来事のうち、三分の二以上がこの湖の周辺で起こりました。ガリラヤ湖の主な水源は、ヘルモン山の雪解け水が流れ込むヨルダン川です。湖とは言え、時には危険なこともあります。ガリラヤ湖は、シリアーアフリカ大地溝帯と呼ばれる、シリア高原からはるかアフリカのビクトリアの滝まで走る渓谷に沿って位置しています。大地溝帯沿いには、いくつかの湖や海があります。ガリラヤ湖があり、死海があり、南には紅海があります。今はもうありませんが、昔は、それらに加えてもう一つ、北部のフラ渓谷に、スペリオル湖と呼ばれる小さめの湖がありました。そのころのガリラヤ湖は、今よりもずっと多くの水量があり、水質も今よりもずっときれいでした。それは、泥の殆どが、ガリラヤ湖に達する前に、一つ目の湖に沈んでいたからです。

ガリラヤ湖の位置は、とても特殊です。基本的に、四方向からの風がぶつかり易いのです。だいたい午後に吹き入れてくる従来の東風と、地中海から吹いてくる西の微風、これで東と西の二つ。それに加えて、北と南からも、シリアーアフリカ大地溝帯からの空気が流れてきます。それで時には、四つの異なる方向から吹いてくる風が衝突し合う場所となることがあるのです。この風のぶつかり合いは、いつも予測出来る訳ではありません。午後になると東の風が吹いてくることは知られていますが、他方向からの風がいつ吹いてきて嵐となるのかは、予測がつかないのです。ですから、イエスが弟子たちに「さあ、湖の向こう岸へ渡ろう」と言われた時、それは大問題でした。弟子たちは恐らく、「行けるんだろうか」、「可能なんだろうか」と自問したことでしょう。それは、敢えて渡ろうとする人などいないような時間帯でした。夕暮れ時だったのです。マルコの福音書４章35節に、こう書かれています。
「さて、その日のこと」、その日、イエスはすでに長時間にわたってガリラヤの色々な場所で教えられた後でした。
「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう。』と言われた。（マルコの福音書4:35）」
興味深いのは、向こう岸へ渡ることに対して、イエスがいかに確信を持ち、自信を持たれていたか、ということです。イエスは、「さあ、向こう岸へ渡れるか、やってみよう。向こう岸へ着けるかも知れない。今日渡れるかも知れないし、そうでないかも知れない」とは言われませんでした。イエスは彼らに約束されました。「さあ、向こう岸へ渡ろう。それは可能だから。わたしがついている。やるんだ。」聖書には、イエスが権威を持って教えられた、とあります。確かに、その口からは慈悲深い言葉が語られました。しかし、イエスは意気地なしではありませんでした。その言葉が取るに足りない、物腰の柔らかいものだからといって、人々に笑われるような人物ではありませんでした。イエスが語られた言葉には、非常に権威があったので、人々は磁石のようにイエスに惹きつけられました。人々がイエスに惹かれた

のは、その外見の美しさのためではありませんでした。事実、イザヤ書第53章は、イエスには見とれるような姿はなかったことを示唆しています。人々が惹かれたのは、その美しさではありませんでした。その権威に惹かれたのであり、外見ではなく、その人柄に惹かれたのでした。彼らは皆、船に乗り込み、誰も、何も言いませんでした。恐らく、イエスがそうおっしゃったのなら、それは可能なのだ、と知っていたからです。ところが、ガリラヤ湖は、時に、私たちの人生のようになることがあります。予測がつかないのです。嵐が起こることもあるし、困難や、あるいは悲劇さえも起こるかもしれません。私は、弟子たちにはそのようなものに対する心構えが出来ていたと思います。ただ、彼らには、状況がどう好転するのかが、分からなかったのです。彼らは、続いて起こった事に驚きました。聖書にはこうあります。

「他の舟もイエスについて行った。すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって水でいっぱいになった。(マルコの福音書4:36-37)」

私も、あるグループを引率してガリラヤ湖を渡った時に、嵐を体験したことがあります。その時の波がどれほど高かったか、忘れもしません。中には、6フィート（約1.8m）から８フィート（約2.4m）に達するものもありました。長さ12マイル（約19km）、幅6.5マイル（約10km）、水深わずか150フィート（約45m）という、この小さな湖の真ん中で、非常に強い風によって高波が起こり、水がどんな船にも浸水してくるとは、全く驚きです。そして面白いことに、船が水でいっぱいになってきていた時に、

「ところがイエスだけは、とものほうで、枕をして眠っておられた。(マルコの福音書4:38)」

何とも興味深いことですね。イエスは、心配しておられませんでした。イエスは狼狽しておられませんでした。イエスは事態を完全に掌握していました。私たちは、神がついておられる事、安心して任せられる事が分かっていれば、全て心配する事はない、と安心する事が出来ます。けれども、この時点では、弟子たちにはまだ、イエスが何者であるかが理解出来ていませんでした。彼らにとっては、イエスは先生であり、ラビでした。イエスはカリスマ的な存在であり、善良な人間でした。中には、イエスを教祖的存在として見ていた人たちもいたでしょう。イエスについていくのは、かっこいい事であったかもしれません。唯一、確かな事は、「神」という言葉が、彼らがイエスを形容する語彙には含まれていなかった事です。

「弟子たちはイエスを起こして言った。『先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われないのですか。』(マルコの福音書4:38)」

彼らはイエスに語り掛けるのに、「先生」という称号を使いました。彼らにとっては、イエスは先生でしかありませんでした。自分たちは死んでしまいそうだ、向こう岸へ渡ることは出来ないだろうと考えて、彼らはイエスを起こしました。彼らは、イエスが毅然として、向こう岸へ渡ることを微塵も疑っていなかったという事実には考え及びませんでした。彼らは、自分たちが死のうとしているのに、一体どうしてイエスは眠っていられるのかということしか考えられませんでした。イエスは、彼らに起こされた事に腹を立てませんでした。私は、それは、イエスがご自身の神性を顕すための良い機会であったからだと思います。と言うのも、その時に起こった事が、彼らの人生を変える事になったからです。

「イエスは起き上がって、風をしかりつけ、湖に『黙れ、静まれ。』と言われた。すると風はやみ、大なぎになった。(マルコの福音書4:39)」

すごいですね。そして面白いのは、聖書に次のように書かれている事です。

「イエスは彼らに言われた。『どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです。』彼らは大きな恐怖に包まれて…（マルコの福音書4:40-41)」

彼らは嵐が収まると、その前よりももっと怖くなったのです。平安がないのは湖ではなく、むしろ自分たちの人生であることに気づくと、彼らは大きな恐怖に包まれました。平安がないのは、彼らの人生だったのです。そして、彼らは大いに恐れたのです。その当時、人々は聖書を持っていませんでした。聖書はまだ印刷されていませんでしたし、このような本の形になっていませんでした。それぞれの書が、一つずつの巻物になっていました。シナゴーグ(会堂)には、聖書全体にわたる巻物が一揃いずつ揃っていたかも知れませんし、エルサレムの神殿にはもっとあったかも知れません。しかし、個人的に自分の聖書を所有する事は出来ませんでした。そこで、人々が、本来そうするべく、神のみことばを口ずさもうとするなら、みことばを暗記しなければなりませんでした。それで、彼らは安息日になるとシナゴーグに歩いて行き、神のみことばが朗読されるのを聞きながら、それを暗記しようとしました。実際に、パウロがその書簡において旧約聖書から引用した聖句の殆どは、彼自身の記憶によるものでした。人々はシナゴーグに行っては、聖句を暗記するのでした。最も覚えやすい書の中に、詩篇があります。それは詩篇が歌のようであったからです。ご承知のとおり、歌というのは、他の書の中身よりも覚えやすいものです。ですから、殆どのユダヤ人が暗記していた書があるとすれば、それはきっと詩篇だったはずです。そしてユダヤ人が詩篇を暗記する際、当然、詩篇89章もそれに含まれていました。詩篇89章は、風や波を静めることの出来る唯一の人が誰であるかを告げています。その8節と9節をお読みします。

「万軍の神、主。だれが、あなたのように力がありましょう。主よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます。(詩篇89:8-9)」

波と風を静めることの出来るお方は一人だけです。その方は神です。皆さんにも想像できると思います。船に乗っていた弟子たちはイエスを「ラビ（先生)」と呼んだばかりでした。イエスは突然立ち上がって、風をしかりつけ、波をしかりつけます。すると、風と波はおさまります。イエスは「黙れ、静まれ」と、詩篇89章で使われているのと同じ言葉を使われました。弟子たちが思いつくことのできる結論は、一つしかありませんでした。インマヌエル―　神は我々と共におられる。普通の先生、ただのラビではありません。神が、船に乗っておられたのです。それで、彼らは大きな恐怖を感じたのかもしれません。もし、神に会う備えが出来ていないなら、神の臨在を恐れるしかありません。イエスは弟子たちにお尋ねになりました。「信仰がないのは、どうしたことです。」信仰は、物事がうまく行っている時や平穏な時には、試されません。信仰は、物事がうまく行かない、困難な時に試されるものです。そういう時に、周りの人々はあなたを見て、あなたの信仰が本当にゆるぎないものであるかどうかを見極めようとします。イエスは弟子たちに、「信仰がないのは、どうしたことです」と、尋ねられました。「わたしが一緒に歩いていて何もかも上手くいっている間は大丈夫だが、今こそ、信頼する時が来たのです。今こそ、信じる時が来たのです。嵐が来た時に。どうしたのです。どうして今、失敗するのです。どうして信仰が消えてしまったのです。わたしがあなたがたと一緒にここにいるのに、どうしてそんなに恐れているのです。信仰がないのは、どうしたことです。」エレミヤ書17章７～８節には、次のように記されています。

「主に信頼し、主を頼みとする者に祝福があるように。その人は、水のほとりに植わった木のように、流れのほとりに根を伸ばし、暑さが来ても暑さを知らず、葉は茂って、日照りの年にも心配なく、いつまでも実をみのらせる。(エレミヤ書17:7-8)」

暑さや、日照りの年が来て、困難な時がやって来ると、その時こそ、あなたは躍進するのです。あなたは実をみのらせ、葉は茂って、誰の目にもあなたが大変よくやっていることが分かるでしょう。もし、あなたが主に信頼するならば、です。ですから、そういう時にこそ、

主に信頼する事が大事なのです。イエスは彼らに、「信仰のないのは、どうしたことです」と尋ねられました。イエスが私たちと一緒に船に乗っておられるなら、私たちには湖を渡ることが出来ます。私たちの人生におけるどんな湖でも、渡ることが出来るのです。実に、私たちが覚えておくべき事は、イエスの臨在がキリスト教の真髄だという事です。困難や試練が無い事ではありません。キリスト教は、困難を避けることが目的ではないのです。キリスト教とは、キリストが居てくださることです。イエスが一緒に居てくだされば、私たちは困難を耐え抜けます。試練を耐え抜けます。患難を耐え抜けるのです。私たちがイエスだけに信頼する事を選ぶなら。イエスご自身がおっしゃいました。

「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。(ヨハネの福音書16:33)」